

令和2年（行ウ）第455号 持続化給付金等支払請求事件  
被告 国 ほか2名

## 原告代表者意見陳述要旨

2021年4月13日

東京地方裁判所民事第51部2D係 御中

原告訴訟代理人弁護士 福田 健 治

第1回口頭弁論期日における原告代表者による意見陳述の要旨は次ページ以下のとおりである。

私が経営する店には、受付業務をしているスタッフが何人かおります。そのなかの一人は子育て中で、子供がこの春、小学校に入学します。元々、そのスタッフはキャストでした。店のオープンの頃からキャストとして働き、結婚した後も働き続け、妊娠を機に受付スタッフになりました。その後、出産して、赤ちゃんだった子があつという間に小学生です。子供の成長を側で見ながら、子育てする人が無理なく働けることや、それが他のスタッフの負担にならないことなど、店として試行錯誤をしてきました。これからもまだ続いてゆくはずです。自分も一緒になって子供を育てているような感覚があり喜びを感じます。そして、その子が大人になるまで店を続けられるかを想像すると、経営者である責任を改めて感じます。同時に社会における責任も自然と感じるようになりました。

コロナ禍でもそれと同じ感覚が生まれました。去年の4月の緊急事態宣言の前後、テレビでは毎日、同じメッセージが流されていました。「今は全員が我慢をする時期だ。みんなが協力しなければ新型コロナはおさえられない」というような内容でした。社会が一丸となってコロナと闘わなければならないのだと受け止めました。そして休業要請が出された時、今は店のことよりも社会を優先すべきなのだとは思い、休業をしました。営業してほしいと懇願するキャストもいましたし、店の売上も激減していたのでとても辛く苦しい決断でした。でもそれが、店を経営する私の、社会の一員としての責任だと考えていました。

しかし国は、性風俗業が社会の一員であることを認めてくれませんでした。持続化給付金や家賃支援給付金は、困っている事業者みんなが受けられる救済です。そんななか、性風俗業だけが救われませんでした。

そのとき私は未来が真っ暗に思えました。そして孤独でした。まるで、嵐の中、性風俗業の者だけが裸で外に追い出されたように感じました。国の説明によると、そうするのが当たり前かのような感じでした。「普通とは違う職業だ」「あつてはいけない職業だ」「潰れたところで誰も困らない」「救う価値のない職業だ」「そんな職業を選んだやつが悪い」と国から言われているようで、涙が出ました。今でも、そのことを考えると涙が出ます。悲しいとか腹が立つとかだけでなく、傷付いたのだと思います。

私は、国からそんな扱いをされる業種でスタッフやキャストに働いてもらっていることに申し訳なさを感じました。スタッフのみんなが転職しやすい年齢のうちに、店を畳んでしまったほうが良いのではないかと頭によぎりました。でも、国からの扱いを知ったスタッフは皆、「この扱いはおかしい」とハッキリと言ってくれました。もしも彼女らがそう言ってくれなければ、私は心が折れていたかもしれません。

その後、今回の裁判について取り上げたテレビワイドショーでコメンテーターが「日陰の職業の人が大きな声を上げるのはいかがなものか」と言っていました。番組内でそれに反論する人はいませんでした。その発言が世間で批判の対象になることもありませんでした。性風俗業の同業者でも「自分たちはそういう職業なのだから声を上げるべきではない」と言う人がいました。「声を上げたらどんな目に遭うか分からない」と言う同業者もいました。

自分自身、店が危機に瀕していなければ、テレビのコメンテーターと同じことを思っていたかもしれません。自分のような職業の人間が社会に対して大きな声で何かを欲しがるのは、とても恥ずかしいことだと思っていました。国からの扱いはおかしいとスタッフが言ってくれなければ心が折れてしまうくらい、自信がありませんでした。

それでも今回声を上げようと思ったのは、私が優先すべきことは店を続けることであり、自分自身も店を続けたいと思ったからです。そして、店のスタッフやキャストがより良い環境で働ける店を作ることが私の役割だからで、そうでなければ店を続けることが自分自身で辛くなるからでもあります。

そんな風に、何が大切なのかを整理してみると、様々な違和感が生まれました。私はこれまで、自分の職業は人に言いづらいものだから社会のはぐれ者なのだと思っていた時期があります。でも店を続けるなかで、私や私の店は明らかに社会の中にあると感じるようになりました。コロナ禍でも、それを嫌というほど実感しました。社会は、嫌でも逃れることができないものだとも感じました。考えてみれば当然のことです。

それと同じように、ごく当然に、この職業は権利を主張するのを恥じるような職業ではないと気が付きました。ごく当然に、性風俗業はひとつの仕事であると気が付きました。そうすると、これまで全く見えていなかった、抑圧の存在に気が付きました。本来は、テレビコメンテーターの言うような日陰の職業など無いはずです。おかしいと思うことには声を上げて良いはずです。

性風俗業は合法に社会の中に存在するのに、社会の外の存在だという扱いを受け続けています。しかもそれが当たり前になっています。更には、それを国が主導しているのです。とてもおかしいと思います。国は、社会に対して「差別をしてはいけない」「差別を助長してはいけない」「職業に貴賤はない」と伝える存在であるべきです。しかし国は今、真逆のことをしています。国にはそのことに気付いて欲しいですし、改めていただきたいです。そして、裁判所には、国による職業差別を許さないでいただきたいです。

以上